

白山ろくにおける森づくり及び耕作放棄地再生の支援

学生団体名 国際交流サポーター（北陸大学）

参加学生 許賢科、孫雨晴、鐘偉、ほか 15 名

1. 地域活動の概要

本プログラムでは、ヤマダチ会と提携し、白山ろくにおける森づくり及び耕作放棄地再生の実践的な作業を行った。この里山保全活動を通じて、白山ろくに住む人々と留学生との交流を行い、白山ろくの過疎地の活性化を促進するのが主な目的であった。また、留学生が白山ろくでの生活を体験することにより、自国で学んだ日本についての知識や日本人の思想や習慣、文化などについて再考する機会を得た。さらに日本の地方が抱えている問題についても考えることができた。

2. 地域活動の具体的な内容

2-1 山菜栽培

第一回目は、6 月に実施、北陸大学からは 14 名の留学生が参加した。「ヤマダチ会」と一緒に道の駅瀬女の裏にある耕作放棄地で山菜の行者ニンニクの種をとって植えた。また、マイタケの菌が入った株を植えた。そして、その後、山の恵みのクマ井を食べた。初めて目にした行者ニンニクの種を手で取る作業では雑草と行者ニンニクを見分けるのが難しいようだったが、すぐにわかるようになり、慣れた手つきで取りながら、雑草と見分け、抜いていた。その種を土のなかに撒いた。作業後、軍手のにおいがかぐとニンニクの香りがして、行者ニンニクの由来を感じることができた。また、畑を耕し、そこにマイタケの株を植えた。慣れない道具を使いながら、土を起し、株を並べ、その上に堆肥をまいた。いつも食べている食材がどのようにできるかを知り、楽しんでいる様子だった。休憩時間に食べたスイカも作業終了後に食べた熊肉もとてもおいしく、食事に感謝することができるような体験だった。留学生の多くは都会で生まれ、育ったために植物を育てた経験がない。初めてする体験が多く、大学内ではできない体験でとても楽しんでいた。



2-2 里山についての学習

第二回目は、9 月に瀬女コテージで学習会を行った。昨年は作業が中心だったが、理論的なことを学ぶために森や里山について考えた。教科書では学ぶことのない「里山」と昔の日本の生活とのかかわりを知ることができた。また、環境保護や現在山で起きているさまざまな問題が「里山」と関係があることを学んだ。留学生の多くは中国からの留学生だったので中国の自然についてや環境問題などを日本の自然や環境問題との比較を通じて考えることができた。また、2 日間で体験した白山ろくの自然や自然

が作りだした川や山を見ながら日本に来る前に想像していた日本との違いを楽しんでいたようだった。

2-3 山菜栽培

第三回は、10月の終わりの土曜日に行った。主な作業は、ワラビの根の植え替えで、今回は尾口町の方と北陸大学の留学生で作業を行った。まずは石川県林業試験場のワラビ畑から根を掘り起こし、それを道の駅瀬女裏の耕作放棄地に植え替えをした。ワラビを知らない学生もいたので、ワラビの説明や掘り起こす際の注意を聞き、作業を行った。また、耕作放棄地ではワラビを並べて植え、それに土をかぶせ、その上に肥料を撒いた。参加者の多くは長靴を持っていなかったためにスニーカーをはいて作業を行っていた。しかしながら泥だらけになっても気にせずに作業を楽しんでいた。今回は天気も良く、山の秋を感じることができた。しかしながら日陰に入ると少し寒さも感じ、金沢から1時間ほど離れた場所にもかかわらず、気温が大きく違うことに驚いていたようだった。また、カモシカとの遭遇など思いがけない自然とのふれあいがあった。地域の方が多かったので、お昼にBBQをしながら交流をした。若者と年配者、日本人と外国人というギャップを生かして、午後の作業前の楽しい時間を過ごすことができた。



2-4 畑の冬支度、よもぎ・ごごみの植栽

第四回目は、11月12日に道の駅瀬女裏の耕作放棄地で作業を行った。今回の作業は畑の冬支度、山ヨモギ、ごごみの植栽を中心に行った。まずは2つのグループに別れ、来春のために畑に堆肥をまくグループとクレソン畑の屋根の取り外しを行った。堆肥をまくグループでは、堆肥の中にいるカブトムシの幼虫に驚きながらも殺さないように箱に幼虫を入れながらスコップ、一輪車を上手に使い、広い畑に堆肥をまくことができた。都会育ちの女の子たちが土で汚れるのも気にしないで作業する姿に地域の人々も感心していた。もうひとつのグループは冷たい水が張っているクレソン畑に入って鉄パイプでできた屋根の解体の手伝いをした。こちらは力仕事だったので男子学生を中心に行った。その後、防草シートの取り外し等、冬に向けた畑の作業を行い、山ヨモギ、ごごみの植栽を行った。インターネットで山ヨモギやごごみの確認をしながらそれらを使つての料理の話で盛り上がっていた。また、作業終了後は白山ふもと会へ移動して、きのこご飯と豚汁を食べた。肉体労働後の若い学生たちはスタッフの用意した料理を全て平らげてしまった。白山ふもと会は解体所でもあるために、イノシシの解体の見学も行った。留学生はイノシシを見るのも動物の解体の作業を見るのも初めてで衝撃を受けていたようだったが、普段自分たちが口にしていて考えるよい機会だったようである。さらに今回は野生のサル軍団も見ることができた。しかしながら、かわいいサルも里山に住む人たちの野菜を食べてしまうことなどを聞き、野生動物との共生についても考えることができた。



2-5 冬の里山調査

第5回目は2月上旬に瀬女コテージで行う予定である。雪の白山ろくを実際に体験したり、雪の多い地方の人々の暮らしについての話を聞いたりしながら雪国での生活について調査を行う予定である。また里山に住む動物や里山で見られる植物などを通じて里山の冬を感じる。さらに白山ろくに住む若い人々と一年間の作業や研修で学んだことについて語る予定である。

3. 地域活動の成果

白山ろくにおける森づくり及び耕作放棄地再生の実践的な作業を行うことができた。今回は里山での活動よりも里山を生かすための様々な取り組みのサポートが中心になった。これまで触れたことのない道具や機械を使い、里山に自然に生えている山菜を耕作放棄地に植えることができた。今後、植栽した山菜を道の駅で販売する予定である。白山ろくの土地を活用し、町に住む人たちが里山での生活を身近なものに感じることができるよう活動の手伝いができたと思う。また、このような作業を通じて、山で生活をする人たちの意識の変化も感じることができた。

里山保全活動を行っている人たちは高齢者が多く、後継者も少ないため、労働力として活躍できたと思う。また、地域の方たちも若い留学生との交流を通じて楽しい雰囲気で作業をしていたのが印象的であり、地域の方々も他国の若者との交流を通じ、新たな発見があったように感じた。留学生は、白山ろく地域住民との交流を通じて、日本人の思想や習慣、文化などについて再考する機会を得ることができた。それと同時に日本が抱えている問題についても学習会や実体験を通じて考えることができた。

4. 来年度の地域活動計画

昨年度は山での活動、今年度は畑での活動など実践的な作業が中心であった。しかし、この活動では、里山保全活動を通じて、白山ろくに住む人々と留学生との交流を行い、白山ろくの過疎地の活性化を促進するのが主な目的である。そこで、来年度はこの活動を発信し、過疎地に人を集めることや集まった人たちでできることを企画したいと考えている。

5. 学生の感想

①山の活動はとてもよかった。なぜなら、自然に接触することができたからである。しかし、それよりも大学では接することのできない地元の住民と交流することができたことが一番良かった。言葉は難しかったけど、人々の優しさに触れることができた。

②初めて日本の田舎生活を体験して、とても楽しかった。中国では都市育ちなので、田畑耕しのような

農業活動を体験したことがなかった。いろいろな作業を通じて、山で生活する人たちの苦労を理解することができた。また、活動の後、美味しい熊肉料理も食べることができたのが良かった。

③山のプログラムに参加して、熊肉、イノシシスープ、栗が入っている美味しいご飯など普段食べられないものを食べることができて幸せだった。また、畑での植栽、収穫体験中に蜘蛛、虫、カエルに遭ったのは恐怖だったがとてもよい体験だった。地元のおばあちゃんやおじいちゃんはすごく可愛くて優しくかった。このプログラムに参加して本当によかった。また来年も参加したいと思っている。

④山のプログラムに参加して本当に楽しかった。記憶があつてからずっと都市に生活している私にとって、畑で作業したり、薪の上に座って BBQ したり、地元のおじいさんおばあさんたちと畑で話すことは、別の世界を発見するような感じだった。慣れない作業で、疲れても、汗が出ても、汚れても、楽しかった。自然の中で作業をしているとあっという間に一日が過ぎてしまうことに気がついた。そして。「えっ、今日ずっと携帯を見ていない」という感じも味わうことができた。携帯やネットに追われている日々から逃げ、自然の美しさや民家の渋さを味わうのは「忙中閑あり」だと思う。

6. 地域活動に対する地域からの評価

白山ヤマダチ会では、手入れされなくなった二次林や耕作放棄地を山菜栽培や自然体験事業の場として活用する事業を昨年度から開始しており、昨年に引き続き北陸大の学生諸氏に参加してもらった。

今年度は、夏から秋にかけて山菜農園の草むしり、ワラビの植栽、山菜農園の冬支度などを手伝ってもらった。最初の方は、大半の参加者にとって農作業が初めてだったため長靴がないなど不安な点があったが、後半には大学の方で長靴や軍手を用意していただき助かった。地域側としても、学生に対する服装や作業の指導方法、用具の充実などを今後改善していく必要があると感じた。

実際の作業に関しては、特に夏場には重労働にも関わらず楽しそうに積極的に作業する姿が印象的だった。堆肥の運搬など人力の必要な作業が多かったため、実際の労働力としても多いに貢献していただいた。また、作業の合間には、昼食でしし汁などを食べながら地域住民と交流する時間もあり、地域にとっても充実した楽しい時間となった。今後も、継続的に学生に参加してもらえるような体制を構築していきたい。